

インド仏教における「法輪」の概念

才華加

1 はじめに

「法輪」(dharmacakra)とは何であろうか。「法」(dharma)と「輪」(cakra)の間にどのような関係が成立するのか。今日までに公表されている「法輪」に関連する研究の殆どは「転法輪経」¹を主題とするものである。水野[1970]は23種の文献の対照研究を行い、「転法輪経」の各系統の変容を明らかにしている。また、草間[1975]は有部における12種類の「転法輪経」を比較研究することにより、三転十二行相説のみを内容とする「転法輪経」が有部の解釈に基づいて新たに編纂されたものであることを明らかにしている。その他に、藤近[1994]は、原始仏教に説かれる梵天勧請や初転法輪の思想は、初期大乘経典(『三品経』や『法華経』等)において形を変えながら受容されていることを明らかにしている。しかしながら、これらの先行研究はいずれも「法輪」概念そのものの変遷を解明していない。

本稿では、『転法輪経』(*Dhammacakkapavattana*)、『阿毘達磨俱舍論』(*Abhidharmakośabhāṣya*)、『解深密経』(*Samdhinirmocanasūtra*)、『現觀莊嚴論註』(*Abhisamayālaṅkāravṛtti*)などといった初期仏教から大乘仏教までの諸経典・論書に基づいて、「法」(dharma)と「輪」(cakra)のそれぞれの意味と両者の関連性に着目し、「法輪」の思想史的展開の解明をめざす。

2 初期仏教及び部派仏教における「法輪」の解釈

以下では初期仏教及び部派仏教において「法輪」(dharmacakra)がどのように理解されていたかについて検討する。これにあたって『転法輪経』と『阿毘達磨俱舍論』の記述を順に確認する。

2.1 『転法輪経』における「法輪」の解釈

『転法輪経』は仏陀が悟りを開いた後、五人の比丘に対して行なわれた最初の説法を記述したものである。本経典はパーリ語で書かれ、そのチベット版も現存する²。『転法輪経』の内容構成は以下の通りである。

1. 世尊が鹿野苑におられる。
2. 五人の比丘に中道・八支聖道を説く。
3. 五人の比丘に四諦を説く。
4. カウンディニヤ(Kauṇḍinya)が法眼を獲得する。
5. 神々が称賛の声を挙げる。

ここに説かれる中道・八支聖道・四諦の教えが「法輪」である。「法輪」に関する記述は以下の通りである。

¹「転法輪経」とはパーリ語で書かれた初期仏典 *Dhammacakkapavattana* という単経を指す名称であるが、ここでは単経の引用型も含む全ての経典の総称とする。

²水野[1970]は、転法輪経が各系統によって様々な変化を受けていると指摘する。

Evam me sutam ekaṃ samayam Bhagavā Bārāṇasīyaṃ viharati Isipatane Migadāye || Tatra kho Bhagavā pañcavaggiye bhikkhū āmantesi || [...] Katamā ca sā bhikkhave majjhimā paṭipadā Tathā-gatena abhisambuddhā cakkhukaraṇī nāṇakaraṇī upasaṃyāya abhiññāya sambodhāya nibbānāya saṃ-vattati || Ayam eva ariyo atthaṅgiko maggo || [...] Idam kho pana bhikkhave dukkham ariyasaccaṃ || [...] Idam kho pana bhikkhave dukkhasamudayam ariyasaccaṃ || [...] Idam kho pana bhikkhave dukkhanirodham ariyasaccaṃ || [...] Idam kho pana bhikkhave dukkhanirodhagāminī paṭipadā ariyasaccaṃ || [...] Idam avoca Bhagavā | attamanā pañcavaggiyā bhikkhū Bhagavato bhāsitam abhinandun | imasmiṃ ca pana veyyākaraṇasmim bhaññamāne āyasmato Koṇḍañña virajaṃ vītamaṃ dhammacakkhum udapādi | [...] Evam pavattite ca pana Bhagavatā dhammacakke Bhum-mā devā saddam anussāvesuṃ || Etam Bhagavatā Bārāṇasīyam Isipatane Migadāye anuttaraṃ dham-macakkam pavattitaṃ appativattiyam samaṇena vā brāhmaṇenavā devena vā Mārena vā Brahmunā vā kenaci vā lokasmin ti || [...] Iti ha tena khaṇena tena layena tena muhuttena yāva Brahmālokā saddo abbhuggacchi | (SN V 420.25ff.)³

「次のように私は聞いた。一時、世尊はヴァーラーナシー地方のリシパタナの鹿野苑に滞在しておられた。その時、世尊は五人の比丘に以下のように告げられた。[…中略…] 比丘達よ、では如来がはっきりと悟ったところの、人の眼を開き、理解を生じさせ、心の静けさ・優れた知恵・正しいさと・涅槃のために役立つ中道とは何か。それは八支聖道である。[…中略…] 比丘達よ、聖者にとっての苦しみという真実（苦諦）はこれである。[…中略…] 比丘達よ、聖者にとっての苦しみの原因（集諦）という真実はこれである。[…中略…] 比丘達よ、聖者にとっての苦しみの消滅（滅諦）という真実はこれである。[…中略…] 比丘達よ、聖者にとっての苦しみの消滅に通じる道（道諦）という真実はこれである。世尊が以上のように教示されたとき、五人の比丘は歓喜して世尊の教えを受け止めた。そして、この教えが示されたとき、長老カウディニヤには清らかで汚れない法眼が生じた。[…中略…] 以上のように、世尊は法輪を転じたとき、地上に住む神々は以下のように声を挙げた。「世尊はヴァーラーナシー地方のリシパタナの鹿野苑において無上の法輪を転じた。沙門であれ、バラモンであれ、天であれ、魔であれ、梵天のいずれであれ、世間で他の誰であろうともそれを逆転させることができない。」[…中略…] それから、その刹那、その瞬間に、その一刻のあい

³Cf. DhCP D 180b1–183a7: 'di skad bdag gis thos pa dus gcig na | bcom ldan 'das yul bā rā ṇa sī'i drang srong lhung ba ri dwags rgyu ba'i gnas na bzhugs so || de nas bcom ldan 'das kyis dge slong lnga sde rnams bos te bka' stsal pa | [...] de bzhin gshegs pa mngon par rdzogs par sangs rgyas nas dbu ma'i lam 'di gsungs so | [...] dbu ma'i lam ni 'phags pa'i lam yan lag brgyad de | brgyad po de ni 'di lta ste | [...] 'di yang dge slong dag sdug bsngal 'phags pa'i bden pa ste | [...] 'di yang dge slong dag sdug bsngal kun 'byung 'phags pa'i bden pa ste | [...] 'di yang dge slong dag sdug bsngal 'gog pa 'phags pa'i bden pa ste | [...] 'di yang dge slong dag sdug bsngal 'gog par 'gro ba'i lam 'phags pa'i bden pa'o | [...] 'di ltar lung du bstan pa de tshun chod nas | tsho dang ldan pa kauṇḍīnyas rdul spangs pa dang | dri ma med pa'i chos kyi mig skyes so | [...] bcom ldan 'das kyis chos kyi 'khor lo rab tu bskor zhing bskor nas | sa'i lha rnams kyis bstod pa'i sgra bsgrags so || dge sbyong ngam | bram ze'am | lha'am | bdud dam | tshangs pa'am | 'jig rten du gzhan sus kyang bskor bar mi nus pa 'di ni bcom ldan 'das kyis yul bā rā ṇa sī'i drang srong lhung ba dang | ri dgas rgyu ba'i gnas su bzhugs nas bla na med pa'i chos kyi 'khor lo rab tu ma bskor ba bskor to | [...] de nas skad cig dang yud tsaṃ de la tshangs pa'i 'jig rten gyi bar du sgras khyab par gyur to | (「ある時、次のように私は聞いた。一時、世尊はヴァーラーナシー地方のリシパタナの鹿野苑に滞在しておられた。そこで世尊は五人の比丘を呼んで以下のように告げられた。[…中略…] 如来は悟りを開いてからこの中道をお説きになった。[…中略…] 中道とは八支聖道のことである。その八つとは以下ものである。[…中略…] 比丘達よ、聖者にとっての苦しみという真実（苦諦）はこれである。[…中略…] 比丘達よ、聖者にとっての苦しみの原因（集諦）という真実はこれである。[…中略…] 比丘達よ、聖者にとっての苦しみの消滅（滅諦）という真実はこれである。[…中略…] 比丘達よ、聖者にとっての苦しみの消滅に通じる道（道諦）という真実はこれである。[…中略…] 以上のように教示されて以後、長老カウディニヤには清らかで汚れない法眼が生じた。[…中略…] 世尊は法輪を転じた。〔法輪を〕転じてから、地上に住む神々は以下のように称賛の声を挙げた。「これは沙門であれ、バラモンであれ、天であれ、魔であれ、梵天のいずれであれ、世間で他の誰にも転じることができないものである。世尊はヴァーラーナシー地方のリシパタナの鹿野苑においてかつて誰も転じなかった無上の法輪を転じた。[…中略…] それから、その刹那、その瞬間に、その声が梵天世界まで達した。）」

だに、その声が梵天世界まで達した。」⁴

以上は世尊がヴァーラーナシー地方で五人の比丘に対して、はじめて説法したことの経緯を記述したものである。つまり、世尊が五人の比丘に対して中道、すなわち、八支聖道及び四諦の教えを説いた。その教えを理解した五人の比丘の中のカウディニヤに法眼が生じた。それが転法輪として、最下の地上に住む神々の世界から最上の梵天の世界まで知られるようになった。ここでは、世尊によって説かれた八支聖道や四諦の教え、あるいはそれを聞いたカウディニヤに生じた理解が「法輪」とみなされている。この『転法輪経』の記述に「法輪」の語源解釈は示されていないが、後述する後代の解釈によると、世尊の教えあるいはカウディニヤに生じた理解が、対象者の心相續に移動する能力を持つ点で「車輪」(cakra)⁵に例えられ、「法輪」(dharmacakra)という概念になったのであろうと考えられる。

2.2 ヴァスバンドゥによる解釈

ヴァスバンドゥ (Vasubandhu: 350–430 頃)⁶の『阿毘達磨俱舍論本頌』は「法輪」に関して以下のように記述している。

brāhmaṇyaṃ brahmacakraṃ ca tad eva brahmavartanāt |
dharmacakraṃ tu dṛṣṭmārgaḥ āśugatvādyarādibhiḥ || (AK VI 54)⁷

「それはまさにブラフマン性であり、ブラフマンの輪である。ブラフマンによって転じられるゆえに。一方、見道は法輪である。速やかに動くことなどのゆえに、また、輻などのゆえに。」

ヴァスバンドゥは自註『阿毘達磨俱舍論』においてこの箇所について以下のように解釈している。

yad eva caitac chrāmaṇyam uktam, brāhmaṇyaṃ brahmacakraṃ ca tad eva kleśānām vāhanād
brāhmaṇyam | brahmacakraṃ tu brahmavartanāt | anuttarabrāhmaṇyayogād bhagavān brahmā |
“eṣa hi bhagavān brahmā ity api śāntaḥ śītūbhūta ity api” iti sūtrāt | tasyedaṃ cakram iti brahma-
cakram, tena pravartitavāt | (AKBh 370.20–371.2)⁸

「さらに、まさにその沙門性と呼ばれるものが、ブラフマン性であり、ブラフマンの輪である。それはまさに諸々の煩惱を排除するからブラフマン性である。さらに、それはブラフマンによって転じられるゆえにブラフマンの輪である。世尊は無上のブラフマン性を具えているからブラフマンである。なぜなら『[帝釈] 経』に

「実にこの世尊はブラフマンであるとも言われ、寂靜であるとも言われ、清涼であるとも言われる」

⁴和訳にあたって長尾他 [1969: 435–439] 所収の櫻部建訳を随時参照した。

⁵ここで言う「車輪」とはインドにおける転輪王が転じる車輪のことである。インドにおける転輪王の概念の形成やその変遷について、手嶋 [2018] がその詳細を論じている。

⁶ヴァスバンドゥの年代については、Deleanu [2019] に従った。

⁷小谷 [1995: 205]: 「それは婆羅門たる在り方(婆羅門性)であり、婆羅門の輪である。婆羅門によって転じられるからである。他方、見道は法輪である。速いことと輻などの故に。」 Cf. AKBh D 20b5–20b6: de nyid tshangs tshul tshangs pa yi || 'khor lo tshangs pas bskor phyir ro || chos kyi 'khor lo mthong ba'i lam || myur bar 'gro sogs rtsibs sogs kyis ||

⁸Cf. AKBh D 30a4–6: dge sbyong gi tshul du bshad pa gang yin pa | de nyid tshangs tshul tshangs pa yi || 'khor lo || nyon mongs pa rnam spong ba'i phyir tshangs pa'i tshul lo || tshangs pa'i 'khor lo ni | tshangs pas bskor phyir ro || bcom ldan 'das ni tshangs pa'i tshul bla na med pa dang ldan pa'i phyir tshangs pa yin te | mdo las | bcom ldan 'das de ni tshangs pa zhes kyang bya | zhi ba dang bsil bar gyur pa zhes kyang bya | zhes gsungs pa'i phyir ro || 'khor lo 'di ni de'i yin pas na tshangs pa'i 'khor lo ste | des bskor ba'i phyir ro ||

と説かれるからである。ここなる彼〔すなわち世尊〕の輪というのが『ブラフマンの輪』(brahmacakra = Gen. Tp.) である。なぜなら、彼によって転じられるからである。」

ここにおいてヴァスバンドゥは、ブラフマン (brahman, tshangs pa)、ブラフマン性 (brāhmaṇya, tshangs tshul)、ブラフマンの輪 (brahmacakra, tshangs pa yi 'khor lo) がそれぞれ何を指すのかについて説明している。彼の理解では、諸々の煩悩を排除する手段となるものが「ブラフマン性」であり、それを有する世尊は「ブラフマン」である。また、ブラフマン性を有する世尊によって転じられる輪が「ブラフマンの輪」である。

また、法 (dharma) と輪 (cakra) の関連性について同書で以下のように説明されている。

dharmacakram tu dṛṅmārgaḥ caṅkramaṇāc cakram, tatsādharṃyād darśanamārgo dharmacakram |
katham asya sādārmyam | **āsugatvādyarādibhiḥ** | āsugatvāt tyajanakramaṇād ajitajayajitādhyā-
vasanād utpatananipatanāc ca | evam āsugatvādibhiḥ | (AKBh 371.4–7)⁹

「一方、見道は法輪である。それは進んで行くから「輪」である。見道はそれ〔すなわち車輪〕と性質が類似するから「法輪」である。どのようにこれと性質が類似しているかと言うならば、〔本偈に〕『速やかに動くことなどのゆえに、また、輻などのゆえに』と言われる。速やかに進むものであるから、〔あるところを〕放棄し、〔他のところに〕向かって行くから、かつて征服したことの無いものを征服し、征服したものを支配下にとどめるから、上昇あるいは下降するからである。以上のことから、速やかに進む等によって〔見道はそれと性質がと類似するのである〕。」

見道は「法」(dharma) である。それは「速やかに進む」等の車輪と類似する性質を具えていることから、「車輪」に喩えられる。それゆえ、見道は「法輪」と言われるのである。ヴァスバンドゥは dharma-cakra 「法輪」の複合語解釈を与えていないが、上記の説明にしたがえば、おそらく dharma-cakra は直喩を内包する複合語で「輪のような法」(*dharmaś cakra iva) ということになるであろう¹⁰。

また、同書には見道について以下のような記述がある。

darśanamārgo dharmacakram iti kuta etat | āryakaunḍinyasya tadutpattau “pravartitaṃ dharmacakram” iti vacanāt | (AKBh 371.10–11)¹¹

「見道は法輪であるところのように言われるのはなぜかというならば、聖者カウディニヤにそれ(=法眼)が生じる時、『法輪が転じられた』と言われるからである。」

⁹Cf. AKBh D 30a6–7: chos kyi 'khor lo mthong ba'i lam | rgyu bas na 'khor lo'o || de dang chos mthun pa'i phyir mthong ba'i lam ni chos kyi 'khor lo yin no || 'di'i chos mthun pa ji lta bu zhe na | myur bar 'gro sogs rtsibs sogs kyis | myur du 'gro ba'i phyir dang | 'dor ba dang 'jug pa'i phyir dang | ma rgyal brgyal bar byed pa dang rgyal ba nral du dgod pa'i phyir dang | 'phar ba dang 'bab pa'i phyir te | myur bar 'gro ba la sogs pa ni de lta bu yin no ||

¹⁰『瑜伽師地論』によれば法 (dharma) そのものが車輪 (cakra) である。したがって、dharma-cakra は同格限定複合語で「法という輪」(*dharma eva cakram) であるという解釈も成立するであろう。YBh D 281b6: bcom ldan 'das kyis kyang kun shes kaṇḍi nya'i rgyud la kun shes pa'i chos nyid mthun par bskor la | de yang gzhan dag la mthun par bskor bar 'gyur ba dang | de dag kyang gzhan dag la mthun par bskor bar 'gyur te | de bas na gcig nas gcig tu brgyud de mthun par bskor ba'i don gyi 'khor lo zhes bya'o || yang dag pa'i lta ba la sogs pa'i chos kyi rang bzhin yin pas na chos kyi 'khor lo'o || (「また、世尊はアージュニャータ・カウディニヤ [Ājñātakauṇḍinya] の相続のために、アージュニャータの本質に合わせて〔法輪を〕転じ、さらに、彼〔アージュニャータ〕は他の人達に合わせて〔法輪を〕転じ、さらに、彼らも他の人達に合わせて〔法輪を〕転じるであろう。それゆえ、一人の人から他の人へと連続して〔その人に〕合わせて転じられるという意味で、cakra [輪] と呼ばれる。それは正見などの dharma [法] そのものであるから dharmacakra [法という輪] である。)」

¹¹Cf. AKBh D 30b2: mthong ba'i lam chos kyi 'khor lo yin no zhes bya ba 'di ga las she na 'phags pa kaunḍinya la de skyes pa na chos kyi 'khor lo bskor to zhes gsungs pa'i phyir ro ||

『転法輪経』の記述によれば、世尊が教えを教示した後、カウンディニヤが法眼を獲得した時、神々は「世尊によって法輪が転じられた」と語った。この記述は、ヴァスバンドゥによると、見道が法輪であることの根拠を示すものである。

また、ヴァスバンドゥは法輪について別の見解も示している。

athavā sarva evāryamārgo dharmacakram vineyasamṭānakramaṇāt | tat tu parasamṭāne darśana-mārgotpādanād vartayitum ārabdham ataḥ “pravartitam” ity ucyate | (AKBh 371.20–22)¹²

「あるいはまた、実に全ての聖者の道が法輪である。なぜなら、所化の相続へと進んで行くからである。しかし、それは他者の相続に見道を生じさせることによって転じ始める。このことによって〔法輪が〕『転じられた』と言われる。」

ここに示される別見解では、見道のみならず、全ての聖者の道が法輪である。なぜなら、すべての聖者の道は所化の相続へと進んで行く点で車輪に等しいからである。

2.3 ヤショーミトラによる解釈

ヤショーミトラ (Yaśomitra) は『明瞭義』(Sphuṭārthā) において上述の箇所に対して以下のよう
に解釈している。

kleśāṇām vāhanād brāhmaṇyam iti | vāhitā anenānekavidhāḥ pāpakā akuśalā dharmā iti brāhmaṇaḥ | tadbhāvo brāhmaṇyam anāsravo mārgaḥ | kathaṃ brahmacakram ity āha | **brahmacakram tu brahmavartanād** iti | yasmād brahmaṇā pravartitam tasmāt brahmacakram iti | **anuttarabrāhmaṇyayogād** iti | anuttarānāsravamārgayogād ity arthaḥ | **eṣa hi bhagavān brāhma** ity etad udāharaṇam jīvakenoktam etat | (AKV 578.23–28)¹³

『諸々の煩惱を排除するからブラフマン性である』。多くの種類の罪業や不善法を排除する手段がブラフマンである。その性質がブラフマン性である。すなわち、無漏道である。どうしてブラフマンの輪であるのかと言うなら、〔本偈に〕『ブラフマンによって転じられるからブラフマンの輪である』と言われる。〔すなわち、〕ブラフマンによって転じられるゆえにブラフマンの輪と呼ばれるのである。『無上のブラフマン性を具えているから』とは、無上の無漏道を具えているからと言う意味である。『実にこの世尊はブラフマンである』というこの〔経典の言葉〕は例示である。以上のことをジーヴァカは説明している。」

ここにおいてヤショーミトラは「ブラフマン」および「ブラフマン性」がそれぞれ何を意味するのかを説明している。彼の理解では、不善法を排除する手段が「ブラフマン」である。その性質が「ブラフマン性」であり、それはつまり無漏道のことを指す。「ブラフマン性」あるいは無漏道を具えている者はまさに「ブラフマン」であり、それは世尊のことである。そのようなブラフマン性（＝無漏道）を具えている者によって転じられる輪が「ブラフマンの輪」である。

次に、法と輪の類似性についてヤショーミトラは以下のように述べている。

¹²Cf. AKBh D 31a1: yang na 'phags pa'i lam thams cad kyang gdul bya'i rgyud la 'jug pa'i phyir chos kyi 'khor lo yin te | de ni gzhan gyi rgyud la mthong ba'i lam bskyed pa'i phyir bskor bar brtsams pa yin pas de'i phyir bskor ba zhes bya'o ||

¹³Cf. AKV D 208b7–209a2: nyon mongs pa rnam spong ba'i phyir tshangs pa'i tshul lo zhes bya ba ni 'dis sdiḡ pa mi dge ba'i chos rnam pa du ma spangs pas tshangs pa'o || de'i ngo bo ni tshangs pa'i tshul yin te | zag pa med pa'i lam mo || ji ltar tshangs pa'i 'khor lo yin zhe na | tshangs pa'i 'khor lo ni | tshangs pas bskor phyir ro zhes bya ba smos te | gang gi phyir tshangs pas bskor ba de'i phyir tshangs pa'i 'khor lo zhes bya'o || tshangs pa'i tshul bla na med pa dang ldan pa'i phyir zhes bya ba ni zag pa med pa'i lam bla na med pa dang ldan pa'i phyir zhes bya ba'i tha tshig go || dper brjod pa ni | bcom ldan 'das de ni tshangs pa zhes kyang bya zhes bya ba 'di ni yin te | 'di ni 'tsho byed kyi smras pa yin no ||

āsugatvādyarādibhir iti | āsugatvādibhir arādibhiś cety arthaḥ | **āsugatvād** iti vistaraḥ | idaṃ mārgasya cakraratnena sādharṃyam ucyate | yathā cakraratnam āsugam evaṃ darśanamārgaḥ | pañcadaśabhiś cittakṣaṇaḥ satyābhisamayād āsuga iti | **tyajanakramaṇāt** | yathā tad anyam deśam tyajaty anyam deśam krāmati | evam ayam āṇataryamārgam tyajati vimuktimārgam krāmati saṃmukhībhāvataḥ | satyāṃtaratyajanakramaṇād vā | **ajitajayajitādhyāvasānāt** | yathā tad ajitāni grāmanigamādīni jayati | jitāni cādhyāvasati | evam ayam āṇataryamārgenājītān satkāyadrṣtyādīn kleśam jayati tatprāticchedāt | jitāṃś cādhyāvasati vimuktimārgena | kleśavisamyogaprāptisahotpādāt | **utpannanipatanāc ca** | yathā ca tat kvacid utpatati kvacin nipatati | evam ayam āṇataryavimuktimārgāṇaṃ punaḥpunaḥ saṃmukhībhāvāt | kāmādiduḥkhādisatyālaṃbanato vā yathāyogam utpatati ca | rūpārūpyadhātvalaṃbanād utpatati | kāmadhātvalaṃbanān nipatātīti | (AKV 578.29–579.11)¹⁴

「『速やかに動くことなどのゆえに、また、輻などのゆえに』というのは、速やかに進むなどの性質のゆえに、および輻などのゆえにという意味である。『速やかに進むものであるから』と詳細に述べられる。〔見〕道と宝輪との共通の属性がここに述べられている。ちょうど宝輪が速やかに進むものであるのと同じように、見道も十五心刹那で諦を現観するから、速やかに進むものである。『〔あるところを〕放棄し、〔他のところに〕向かって行くから』。それ〔宝輪が〕ある場所を放棄し、他の場所に向かって進んで行くように、この〔見道〕もまた無間道を放棄し、〔解脱道を〕直証することによって、解脱道に向かって進んで行く。あるいは、ある諦〔という所縁〕を放棄して別の〔諦という所縁へと〕向かって進むからである。『かつて征服したことの無いものを征服し、征服したものを支配下にとどめるから』。それ（宝輪）が未だ征服していない村や町などを征服し、既に征服した村や町などを支配下にとどめるように、この〔見道〕も未だ征服していない有身見などの煩悩を、無間道によって、その得を断じることによって征服し、既に征服した煩悩を、解脱道によって、煩悩の離繫得と俱起することによって制圧下にとどめる。『上昇あるいは下降するから』。その〔宝輪〕はあるところでは上昇し、またあるところでは下降するように、この〔見道〕もまた、無間道や解脱道が繰り返し現前することによって、あるいは、欲〔界〕などに属する苦諦などを認識することによって、適宜、上昇したり下降したりする。すなわち、色〔界〕や無色界を認識することによって上昇し、欲界を認識することによって下降するのである。」

ヤショーミトラは見道（無間道・解脱道）がなぜ転輪聖王の宝輪と共通の性質を有するのかという理由について詳細に述べている。彼によると、見道は [1] 速やかに進むものである宝輪と同じように十五心刹那で諦を現観する。[2] あるところを放棄し、他のところに向かって進んで行く宝輪と同じように見道はある所縁を放棄して別の所縁へと向かって進む。[3] かつて征服したことの無いものを征服し、征服したものを支配下にとどめる宝輪と同じように見道は未だ征服していない有身見などの煩悩を断じ、既に征服した煩悩を制圧下にとどめる。[4] 上昇あるいは下降する宝輪

¹⁴Cf. AKV D 209a2–209b1: myur bar 'gro sogs rtsibs sogs phyir || zhes bya ba ni myur bar 'gro ba la sogs pa'i phyir dang | rtsibs la sogs pa'i phyir zhes bya ba'i tha tshig go || myur du 'gro ba'i phyir dang zhes bya ba rgyas par 'byung ba ni 'di ni mthong ba'i lam 'khor lo rin po che dang chos mthun par brjod pa yin te | ji ltar 'khor lo rin po che myur du 'gro ba de bzhin du mthong ba'i lam yang sems kyi skad cig bco lngas bden pa mngon par rtogs pa'i phyir myur du 'gro ba yin no || 'dor ba dang 'jug pa'i phyir zhes bya ba ni ji ltar yul gzhan 'dor zhing yul gzhan du 'jug pa de bzhin du 'dir yang bar chad med pa'i lam ni 'dor la rnam par grol ba'i lam ni mngon du 'gyur ba'i sgo nas 'jug pa 'am bden pa'i dmigs pa gzhan 'dor ba dang 'jug pa'i phyir ro || ma rgyal ba rgyal bar byed pa dang rgyal ba māl du dgod pa'i phyir zhes bya ba ni ji ltar de grong dang grong rdal la sogs pa ma rgyal ba las ni rgyal bar byed la rgyal ba dag ni māl du dgod pa de bzhin du 'di yang bar chad med pa'i lam gyis 'jig tshogs la lta ba la sogs pa nyon mongs pa ma rgyal ba rnams las ni de dag gis thob pa gcod pa'i sgo nas rgyal bar byed la | rnam par grol ba'i lam gyis rgyal ba rnams ni nyon mongs pa'i bral ba'i thob pa dang lhan cig skyes pa'i sgo nas māl du 'god do || 'phar ba dang 'bab pa'i phyir zhes bya ba ni ji ltar de la lar 'phar shing la lar 'bab pa de bzhin du 'di yang bar chad med pa'i lam dang rnam par grol ba'i lam rnams yang dang yang mngon du byed pa'am | 'dod pa la sogs pa'i sdug bsngal la sogs pa'i dmigs pa'i sgo nas ci rigs par 'phar zhing 'bab ste | gzugs dang gzugs med pa'i kham la dmigs ba'i phyir 'phar ro || 'dod pa'i kham la dmigs pa'i phyir 'bab bo ||

と同じように見道は色界や無色界を認識することによって上昇し、欲界を認識することによって下降するという理由により宝輪と同じ性質を具えている。

さらに、ヤショーミトラは「法輪」という表現における「法」は見道のみならず、全ての聖者の道を表しているというヴァスバンドゥの見解について、次のように述べる。

athavā sarva evāryamārgo darśanabhāvanāśaikṣamārgo dharmacakram | vineyajanasaṃtāne kramaṇāt | kramaṇac cakram iti kṛtvā | (AKV 582.13–15)¹⁵

「あるいはまた、見道、修道、無学道というまさに全ての聖者の道が法輪である。なぜなら、教化されるべき人の相続へと進んで行くからである。というのも、『進んで行くから輪である』という〔語義解釈〕が考慮されるからである。」

ヤショーミトラは「法輪」という表現における「法」が見道のみ限定されるとは考えない。なぜなら、見道、修道、無学道の全ての聖道が所化の心相続に向かって進んで行くという点で、輪と同じ性質を持つからである。

2.4 チム・ジャムペーヤンによる解釈

また、チベット仏教カダム派の学僧チム・ジャムペーヤン (Mchims 'jam pa'i dbyangs: 1210–1289) はヤショーミトラの理解を踏まえた上で、『俱舍論釈莊嚴論』、通称『チムズー』(Mchims mdzod) において上述の箇所に対して以下のように解釈している。

bzhi pa dge sbyong gi tshul du bshad pa bar chad med pa'i lam zag med rnam grol 'dus byas dang bcas pa gang yin pa de nyid ni | sdig pa mi dge ba'i chos rnam pa du ma spangs bas tshangs pa dang | nyon mongs pa spong ba'i zag med kyi lam yin pas tshangs pa'i tshul yang yin te | brgya byin gyi mdo las | bcom ldan 'das de ni tshangs pa zhes kyang bya | zhi ba dang | bsil bar gyur pa zhes kyang bya'o | zhes kyang gsungs pa'i phyir ro | des na tshangs pa dang | zhi ba dang | bsil bar gyur pa zhes bya ba ni bcom ldan 'das yin te | tshangs pa'i tshul zag med kyi lam bla na med pa dang ldan pa'i phyir dang | nyon mongs pa tshangs pa dang zhi ba dang bsil ba'i phyir ro | tshul ni nyon mongs pa spong ba de'i thabs zag med kyi lam yin pa'i phyir ro | de ni tshangs pa'i 'khor lo'ang yin te | 'khor lo dang 'dra ba'i phyir dang | tshangs pa bcom ldan 'das kyis bskor ba'i phyir ro || (Mchims mdzod 59a4–59b2)

「第四『〔無漏道は〕沙門の属性であるという点についての説明』。

まさに無漏の無間道および有為の解脱道は、ブラフマン性（ブラフマンが有する属性）であるともいわれる。なぜなら、ブラフマンとは多くの種類の罪業や不善法を排除する者であり、〔その道は〕煩悩を排除する無漏道であるからである。『帝釈経』に『その世尊はブラフマンであるとも言われ、寂静であるとも言われ、清涼であるとも言われる』と説かれる。したがって、ブラフマンと言われ、寂静と言われ、清涼と言われる者は世尊である。なぜなら、〔世尊は〕ブラフマン性、すなわち無漏の最上道を具えるからであり、〔世尊にとって〕煩悩は既に除去されており、鎮まっており、清涼となっているからである。〔ブラフマン〕性（梵性）といわれるのは、その煩悩の断滅の手段である無漏の道だからである。それはブラフマンの輪（梵輪）でもある。なぜなら車輪と類似するからであり、ブラフマンすなわち世尊によって転じられたものだからである。」

¹⁵Cf. AKV D 212a7–212b1: yang na 'phags pa'i lam thams cad de | mthong ba dang | bsgom pa dang | mi slob pa'i lam yang chos kyi 'khor lo yin te | 'dul ba'i skye bo'i rgyud la 'jug pas 'khor lo zhes bya ba'i phyir ro ||

これは『阿毘達磨俱舍論本頌』の前二句に対する註釈である。チム・ジャムペーヤンの解釈によれば、世尊が「ブラフマン」(tshangs pa)である理由は、幾つもの種類の不善法を断じているからである。さらに、煩惱を断じる無漏道は世尊が有する属性であるから「ブラフマン性」(tshangs pa'i tshul)である。したがって、「ブラフマンの輪」(tshangs pa yi 'khor lo)とは、世尊によって獲得された清浄な智慧、すなわち無漏道を指している。それは車輪と類似することから比喩的に「輪」('khor lo)と呼ばれる。次に、本頌の後半二句について以下のように解釈がなされる。

de la chos kyi 'khor lo ni mthong ba'i lam de nyid yin te | myur bar 'gro ba dang | sogs pas bsdus pa 'dor ba dang 'jug pa dang | ma rgyal ba las rgyal bar byed pa dang rgyal ba rnal du 'god pa dang | 'phar ba dang 'bab pa zhes bya ba 'khor lo rin po che dang chos mthun pa'i phyir ro | (*Mchims mdzod* 59b2–59b3)

「その〔詩節における〕『法輪』とはまさにその見道である。なぜなら、速やかに進むという性質、あるいは『など』(sogs)という語によって包摂される〔ある場所を〕放棄するという性質、〔別の目的地に〕向かって行くという性質、かつて征服したことの無いものを征服するという性質、征服したものを支配下にとどめるという性質、上昇・下降するという性質の点で宝輪と類似するからである。」

ここではヴァスバンドゥの見解が祖述される。見道は[1]速やかに進むものであり、[2]ある場所を放棄し、別の目的地に向かって進んで行く。[3]かつて征服したことの無いものを征服し、征服したものを支配下にとどめる。[4]上昇・下降するという点で、法輪聖王の宝輪と同じ性質を具えることから、輪に喩えられるのである。

以上の事柄をまとめると次の通りである。『転法輪経』と『阿毘達磨俱舍論』は見道を法輪とみなす点で一致する。ただし、『転法輪経』では、見道の他に中道、八支聖道、四諦が法輪とみなされるが、『阿毘達磨俱舍論』では見道も含む聖者の全ての道が法輪とみなされるという違いがある。さらに、『阿毘達磨俱舍論』には、世尊を「ブラフマン」とみなした上で、「ブラフマンの輪」と「法輪」を同一視する考えも見られる。

3 大乘仏教における「法輪」の解釈

大乘仏教において「法輪」はどのように解釈されるのか。大乘仏教における「法輪」の解釈を、ラトナーカラシャーンティ (Ratnākaraśānti: 10世紀末–11世紀初頭)の『現観莊嚴論註・有浄論』(*Abhisamayālaṅkārikāvṛttiśuddhamatī*)、ダルマミトラ (Dharmamitra)の『現観莊嚴論釈・明瞭句論』(*Abhisamayālaṅkārikāprasphuṭapadā*)、『解深密経』(*Samdhinirmocanasūtra*)等に基づいて確認する。

3.1 ラトナーカラシャーンティによる解釈

ラトナーカラシャーンティの『有浄論』に以下のようにある。

tshangs pa'i 'khor lo skor bar mdzad | tshangs pa ni de bzhin gshegs pa ste | 'jig rten thams cad las mngon par 'phags pa'i phyir ro | tshangs pa de rnam kyi'o | yang na tshangs pa ni thar pa ste | de'i don gyi phyir tshangs pa'i 'o | 'gro ba'i don gyis na 'khor lo ste | chos kyi 'khor lo zhes bya ba'i don to | de bzhin gshegs pa rnam kyi gsung rab yan lag bcu gnyis ni chos so || (Ś D 113b7–114a2)

「〔如来は〕ブラフマンの輪(*brahmacakra)を転じた。『ブラフマン』とは如来のことである。なぜなら〔如来は〕全ての世間の人々よりも卓越した存在だからである。〔brahma-cakraは第六格の格限定複合語であり〕『かのブラフマン達の〔輪〕』を意味する。もしくは〔brahma-cakra

は第四格の格限定複合語であって、『ブラフマン』は解脱を意味し、その〔解脱の〕ための〔輪〕であるので『ブラフマンの〔輪〕』という。進行するという性質のゆえに『輪』である。それは『法輪』と同じ意味である。如来の十二分経が法である。」

ラトナーカラシャーンティによれば、brahma-cakra は第六格の格限定複合語 (Gen. Tp.) または第四格の格限定複合語 (Dat. Tp.) として解釈される。第一解釈によれば「ブラフマン」とは如来のことであり、brahmacakra は「ブラフマン (=如来) の輪」を意味する。第二解釈によれば「ブラフマン」とは解脱のことであり、brahmacakra は「ブラフマン (=解脱) のための輪」を意味する。いずれにせよ dharmacakra 「法輪」はこの二種の brahmacakra と同義であり、如来が解脱を目的として説いた十二分経のことを意味する。

その他に、ラトナーカラシャーンティは『最上真髓論』(Sārottamā) において「法輪」の語義解釈を次のように示す。

chos kyi 'khor lo lan gsum rnam pa bcu gnyis su bskor ba'i chos ni bstan pa'o || de nyid ni 'khor lo ste gdul bya'i rgyud la 'pho ba'i phyir ro || (S D 96a1)

「三段階にわたって十二のあり方で転じられた法という教えはまさに『輪』である。なぜなら、それは所化の心相続に移行するものだからである。」

「法」すなわち仏陀の教えは、所化の心相続に移行するので「輪」である。ここには dharma-cakra を同格限定複合語「法という輪」(*dharma eva cakram) とする解釈も示唆されている。

3.2 ダルマミトラによる解釈

また、ダルマミトラの『現観莊嚴論釈・明瞭句論』では、次のように「法輪」の語義解釈を与えている。

de dag gi gnyen por gyur pa ni thub pa chen po'i chos kyi 'khor lo ma lus pa ste chos ni bstan pa'i chos gtso bor byas pa'o || 'khor lo ni gdul bya'i rgyud la 'pho bar snang bas na'am | tshogs kyi don gyi phyir 'khor lo ste sgra'i don ni de dag dang nye ba'i phyir ro || (PP D 19b1-2)

「それら〔の煩惱〕の対治となるものが、偉大な牟尼の一切の法輪である。〔ここで〕『法』とは〔仏陀によって〕教示された法を主とするものである。〔それは〕cakra (輪) である。なぜなら、所化の心相続に進行するものとして認識されるので、あるいは、集合体の意味を持つので、〔dharma という〕言葉の指示対象はそれら(「進行するもの」「集合体」)に近似するからである。」

ここでダルマミトラは「法輪」という表現に含まれる「法」を主として仏陀の教えの意味で理解している。さらに、彼はその仏陀の教えが cakra に類似する理由として、[1] 所化の心相続に進行するという性質を持つから、[2] 集合体であるから (cakra = 「集合体」) という二つの点を挙げている。この内、後者の解釈にしたがうならば、dharmacakra 「法輪」は「輪のような法」ではなく「法 (= 教え) の集合体」を意味することになる。

なお、ダルマミトラはこの場合の「法」が主として仏陀の教えであるという考えを示すが、『阿毘達磨俱舍論』に見られたような、修行者が獲得する聖者の道を法輪とみなす考えも受け入れている。

gzhan yang chos kyi 'khor lo ni mthong ba'i lam mo || zhes bstan pa yang nges pa med pa kho na ste | chos kyi 'khor lo kha cig ni tshogs kyi lam mo || kha cig ni sbyor ba'i lam mo || kha cig ni bar chad med pa'i lam gyi bar ro || (PP D 21a2-3)

「さらにまた、『法輪とは見道である』という説も決して確定見解ではない。ある法輪は資糧道であり、またある法輪は加行道であり、さらにまたあるものは無間道に至るまでのものをいう。」

以上のように、ダルマミトラは法輪は見道のみでなく、修行者が獲得する資糧道や加行道などの道を等しく法輪とみなしている。これは見道以上の聖者の道のみを法輪とみなすヴァスバンドゥの見解とは大きく異なる考えである。

3.3 『解深密経』における「法輪」の解釈

大乘経典『解深密経』では仏陀の教えが法輪とみなされるが、その法輪を三段階に分ける説、すなわち有名な「三転法輪」の説が現れる。以下はデルゲ版のチベット大蔵経カンギュルに見られる『解深密経』の当該箇所である。

bcom ldan 'das kyis dang por yul bā rā ṅa sī drang srong smra ba ri dwags kyi nags su theg pa la yang dag par zhugs pa rnam la 'phags pa'i bden pa bzhi'i rnam par bstan pas chos kyi 'khor lo ngo mtshar smad du byung ba | sngon lhar gyur ba'am | mir gyur pa sus kyang chos dang 'thun par 'jig rten du ma bskor ba gcig tu rab tu bskor te | bcom ldan 'das kyi chos kyi 'khor lo bskor ba de'ang bla na mchis pa | skabs mchis pa | drang ba'i don rtsod pa'i gzhi'i gnas su gyur pa lags la | bcom ldan 'das kyis chos rnam kyis ngo bo nyid ma mchis pa nyid las brtsams | skye ba ma mchis pa dang | 'gag pa ma mchis pa dang | gzod ma nas zhi ba dang | rang bzhin gyis yongs su mya ngan las 'das pa nyid las brtsams nas theg pa chen po la yang dag par zhugs pa rnam la stong pa nyid smos pa'i rnam pas ches ngo mtshar rmad du byung ba'i chos kyi 'khor lo gnyis pa bskor te | bcom ldan 'das kyi chos kyi 'khor lo bskor ba de'ang bla na mchis pa | skabs mchis pa | drang ba'i don | rtsod pa'i gzhi'i gnas su gyur pa lags la | bcom ldan 'das kyis chos rnam kyis ngo bo nyid ma mchis pa nyid las brtsams | skye ba ma mchis pa dang | 'gag pa ma mchis pa dang | gzod ma nas zhi ba dang | rang bzhin gyis yongs su mya ngan las 'das pa nyid las brtsams nas | theg pa thams cad la yang dag par zhugs pa rnam la legs par rnam par phye ba dang ldan pa | shin tu ngo mtshar rmad du byung ba'i chos kyi 'khor lo gsum pa bskor te | bcom ldan 'das kyi chos kyi 'khor lo bskor ba 'di ni bla na ma mchis pa | skabs ma mchis pa | nges pa'i don lags te | rtsod pa'i gzhi'i gnas su gyur pa ma lags so || (SNS D 38a6–39a2)

「[1] 世尊は最初に、ヴァーラーナスィー地方のリシパタナ (Drang srong smra ba, *Rṣīpatana/Rṣīvadana)¹⁶の鹿野苑において、〔声聞〕乗に向かって進んでいる人々に対し、四聖諦の教えによって、驚嘆に値し、希有であり、かつて天であったものであれ、人であったものであれ、誰にも同じ仕方では転じることができなかった法輪を転じた。しかし、その世尊による転法輪 (chos kyi 'khor lo bskor ba, *dharmacakrapravartana) は、無上のものではなく、論争の余地があり、未了義であり、論争の対象となるものであった。[2] 次に、世尊は諸法の無自性性、乃至、不生不滅、本来寂靜、自性涅槃を主題として、大乘に向かって進んでいる人々に対し、空性の説示という形で、非常に驚嘆に値する第二の法輪を転じた。その世尊による転法輪もまた、無上のもではなく、論争の余地があり、未了義であり、論争の対象となるものであった。[3] 次に、世尊は諸法の無自性性、乃至、不生不滅、本来寂靜、自性涅槃を主題として、一切乗に向かって進んでいる人々に対し、非常に明瞭に区別され (legs par rnam par phye ba dang ldan pa, *suvibhakta, Ch. 以顯了相)、非常に驚嘆に値する第三の法輪を転じた。この世尊による法輪は、無上のものであり、論争の余地がなく、了義であり、論争の対象とならないものである。」

¹⁶Lamotte [1935: 86] はRṣīvadana というサンスクリットを想定する。

以上はツォンカパの『善説心髓』(*Legs bshad snying po*)において引用され、後代のチベットにおける三転法輪の解釈の根拠となった記述である。この記述によると、世尊は三種の所化に対してそれぞれ異なる教えを説いたことになる。すなわち、[1] 乗に向かって進んでいる人々 (*theḡ pa la yang dag par zhugs pa rnam*) に対して四聖諦を説き、[2] 大乘に向かって進んでいる人々 (*theḡ pa chen po la yang dag par zhugs pa rnam*) に対して空性の教えを説き、[3] 一切乗に向かって進んでいる人々 (*theḡ pa thams cad la yang dag par zhugs pa rnam*) に対して了義・未了義の弁別を説いた。

『解深密経』の記述をそのまま理解すれば、法輪は対象となる所化の区別や、時間的前後の点から、初転法輪・中転法輪・後転法輪の三つに区分されることになる。三転法輪に関して時間的前後の区別が成立するかどうかについて、プトゥンやジャムヤンシェーパは疑問を示しているが、いずれにせよ、ここで明らかなのは、『解深密経』では、法輪を世尊が異なる所化¹⁷に対して三つの段階にわたって説いた全ての教えを意味するということである。

4 小結

以上検討したインド仏教における法輪 (*dharmacakra*) の概念について、次のようにまとめることができる。

法輪の概念は初期仏教経典に現れる。仏陀による最初の説法の経緯を記述したのものとして有名な『転法輪経』では、仏陀によって説かれた八支聖道や四諦の教えが法輪とみなされている。その教えを聞いたカウンディニヤには「清らかで汚れのない法眼」が生じたとされる。

一方、部派仏教のアビダルマの教義では、仏陀の教えを聞いた者に生じる理解、あるいは修行によって獲得される道が法輪とみなされている。ヴァスバンドゥもヤショーミトラも、その聖道の全てが「所化の心相続へと進行するもの」という *cakra* の語義解釈に合致するから法輪であると考える。

次に、大乘仏教では、仏陀によって説かれた十二分経が法輪であるという初期仏教の考えが再び現れる。さらに、大乘仏教では、アビダルマの教義も踏まえ、修行者が獲得する道を法輪とする考えも認められる。ダルマミトラによれば、見道のみならず、修行者が獲得する資糧道や加行道などの全ての道が等しく法輪である。さらに、大乘経典『解深密経』では、様々な所化を段階的に教導するという観点から、法輪を初転法輪・中転法輪・後転法輪の三段階に区別する独自の解釈が現れ、この解釈が後のチベットの議論へと発展する。

参考文献

(1) インド文献

AK *Abhidharmakośa* (Vasubandhu): see **AKBh**.

AKBh *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu): P. Pradhan ed. *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*, Tibetan Sanskrit Works Series Vol. VIII. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute. 1975.

AKBh D *Ahidharmakośabhāṣya*: Tibetan Sde dge ed. *Mngon pa*. Ku. Tohoku No. 4090.

AKV *Sphuṭārthā nāma Abhidharmakośavyākhyā* (Yaśomitra): U. Wogihara ed. *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā: The Works of Yaśomitra*. Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store. 1936.

¹⁷ 『解深密経』に基づくツォンカパの見解では、三転法輪がそれぞれ異なる所化を教導するために世尊によって説かれたとなるが、チョナン派のトルポパはそれぞれ異なる所化ではなく、一人の所化を段階的に導いていくために世尊が三転法輪を転じたと主張する。詳細は彼の主著『山法了義海』(*Ri chos nges don rgya mtsho*)を参照。

AKV D *Sphuṭārthā nāma Abhidharmakośavyākhyā* (Yaśomitra): Tibetan Sde dge ed. *Mngon pa*. Ngu. Tohoku No. 4092.

DhCP D *Dharmacakrapravartana*: Tibetan Sde dge ed. *Shes phyin*. Ka. Tohoku No. 31.

PP D *Abhisamayālaṃkārikārasphuṭapadā* (Dharmamitra): Tibetan Sde dge ed. *Shes phyin*. Nya. Tohoku No. 3796.

Ś D *Abhisamayālaṃkārikāvṛttiśuddhamatī* (Ratnākaraśānti): Tibetan Sde dge ed. *Shes phyin*. Ta. Tohoku No. 3801.

S D *Āryāṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāpañjikāsārottamā* (Ratnākaraśānti): Tibetan Sde dge ed. *Shes phyin*. Tha. Tohoku No. 3803.

SN *Samyuttanikāya V*: London: The Pali Text Society. 1976.

SNS D *Samdhinirmocanasūtra*: Tibetan Sde dge ed. *Mdo sde*. Ca. Tohoku No. 106.

(2) チベット文献

Mchims mdzod *Chos mngon mdzod kyi tshig le'ur byas pa'i 'grel pa mngon pa'i rgyan* (Mchims 'jam pa'i dbyangs). Bkra shis 'khyil ed.

(2) 欧文資料

Lamotte, Étienne
1935

Samdhi-nirmocana Sūtra : L'explication des Mystères. Paris: Adrien Maisonneuve. 1935.

Florin, Deleanu
2019

Dating with Procrustes: Early Pramāṇavāda Chronology Revisited (Bulletin of the International Institute for Buddhist Studies 2). International Institute for Buddhist Studies of the International College for Postgraduate Buddhist Studies.

(3) 和文資料

小谷信千代
1995

『チベット俱舎学の研究—『チムゼー』賢聖品の解説』文栄堂書店

草間法照
1975

「転法輪経の一考察」『印度学仏教学研究』23-2: 222–225.

手嶋英貴
2018

「転輪王説話の生成—その始原から「輪宝追跡譚」の成立まで」『人文学報』112: 27–86.

長尾雅人他
1969

『世界の名著 1 バラモン教典 原始仏典』中央公論社

藤近恵市
1994

「初期大乘経典における転法輪」『印度学仏教学研究』43-2: 178–183.

水野弘元
1970

「転法輪経について」『仏教学研究』1: 114–92.

(ツェホージャ、広島大学大学院博士課程後期 [インド哲学])

The Concept of *dharmacakra* in Indian Buddhism

TSHE DPAL RGYAL

What is *dharmacakra*? What kind of relationship is established between *dharma* and *cakra*? Although numbers of studies have been made on the concept of *dharmacakra* so far primarily based upon the *Dharmacakrapravartana*, no research has focused on its historical development.

This paper examines the meaning of *dharma* and *cakra*, respectively, as well as the interpretation of the compound *dharmacakra*. Furthermore, it examines the historical development of the concept of *dharmacakra* on the basis of various scriptures and treatises of both early Buddhism and Mahāyāna Buddhism, such as *Dharmacakrapravartana*, *Abhidharmakośabhāṣya*, *Samdhinirmocanasūtra*, and *Śuddhamatī*, and *Prasphuṭapadā*.